

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

# 地域づくりinほくりく

2014 SUMMER



阿賀野川金屋地先より上流を望む

絵 土田 和男

❖ 第2回定時総会開催報告 2

❖ 随想 4

木村 宏((一社)信州いいやま観光局 事務局次長)  
「新たな観光時代を迎える飯山の期待」

❖ 特別企画 災害の教訓を未来に活かす 6

新潟地震50周年事業 防災講演会  
今、大地震が起こったらー過去の地震の痕跡から考えるー

❖ 特集「地域とともに」 10

新潟大学 災害・復興科学研究所  
流域保全学研究部門の紹介

❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」 14

喜多方の思い出は「喜「うれしなみだ」  
喜多方を漢字のまちにする会(福島県喜多方市)

❖ 北陸再発見 16

郷土の歴史を伝える最中「手取川昭和九年」  
(石川県能美市)

❖ 会員だより 18

❖ 伝言板 24

## 第2回定時総会開催報告

去る6月19日、第2回定時総会がANAクラウンプラザホテル新潟において開催されました。

まず、出席会員数報告で、会員790名中、677名（委任状提出者含む）の出席が確認されました。新人会員は29名です。

続いて行われた理事長挨拶は次のとおりです。

### ■ 理事長挨拶

当協会は北陸建設弘済会として昭和42年4月に設立しこれまで半世紀近く、建設事業の円滑な推進を図り、国土の発展に寄与することを目的に、国が行うインフラ整備・管理の補助的業務を中心に取り組んできました。その間、国民のニーズの多様化、これに伴う行政の高度化、多様化、更には国家公務員の定員削減等により、当協会の役割は増加の一途をたどってきました。

これまで行政の補助的業務は公平性・中立性が強く求められ、中間法人が担うものとして当協会が50年近くその任に当たってきました。その間、国土交通省の認可団体としてその時々時代の要請に応じ改革が求められ、国からの要請をその都度理事会・総会の決議を得て改革を進めてきたところであります。

特に大きな改革要請は、平成22年の「発注者支援業務等からの撤退」要請がありました。この要請は、組織の存亡に関わる大変な問題であると共に、職員の職場確保やこれまでに培ってきた技術力・ノウハウの散逸等多くの問題・課題を含んでおりました。

この事業からの撤退に包含されている多くの問題・課題等を如何に解決するかについて委員会等で議論を重ね検討してきたところであります。これらの検討結果を踏まえ一昨年の総会で

新会社設立の決議を受け、昨年10月に地元民間企業の協力を得て新会社「建設マネジメント北陸」を設立し、三年計画で事業譲渡することとし、第一弾として昨年12月に工事監督業務を事業譲渡したところであります。

これまでに培ったノウハウの継承についても関係する職員全員が新会社移籍に同意を得ることができ、現在は「建設マネジメント北陸」に業務が引き継がれ問題なく取り組まれているところであります。今後は譲渡計画に基づき第二弾、第三弾の事業譲渡を職員の協力を得ながら進めていくこととしております。



挨拶する大林 厚次理事長

一方、当協会に残された課題は、平成27年度までに発注者支援業務等から撤退した後の協会運営であります。

これまでの収益事業を譲渡した後、当協会を存続させるためには新たな収益事業の発掘が必要であり、今まで得意としてきた業務分野に加え、これから必要とされるインフラの老朽対策や防災点検等新たなニーズの掘り起こしを行いながら、収益事業の確保に職員一同知恵を出し取り組まなければなりません。また、今後の業務量が明確にならないなか、技術者不足の環境のなかで新たな体制づくりも怠ることはできません。

まだまだ多くの課題が山積しておりますが、専門家や関係各位と連絡を密にして職員一丸となって、力強い「一般社団法人北陸地域づくり協会」を目指し取り組む所存であります。

引き続き会員の皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

## 議題

次に、佐久間専務理事から平成25年度事業報告及び公益目的支出計画実施報告があり、第1号議案「平成25年度決算承認」が審議され、異議なく承認されました。



さらに、第2号議案「定款の一部改正」、第3号議案「役員選任」、第4号議案「役員報酬の総額上限」が審議され、事務局案どおり異議なく承認されました。

### 新役員と体制

理事長	大林 厚次	(再・常)
専務理事	佐久間 満	(再・常)
理事	川嶋 繁男	(再・常)
理事	田巻 清文	(再・非)
理事	八田 守	(再・非)
理事	本田 信男	(再・非)
理事	丸山 暉彦	(再・非)
監事	石黒 厚子	(再・非)
監事	平 要志和	(再・非)

※( )内は、再任、常勤・非常勤別

## 特別講演会

◆講師 <sup>みつほし たかあき</sup> 三橋 貴明 (経世論研究所長・中小企業診断士)

◆演題 国民経済と地域経済

～北陸を潤す「真のアベノミクス」について語ろう～

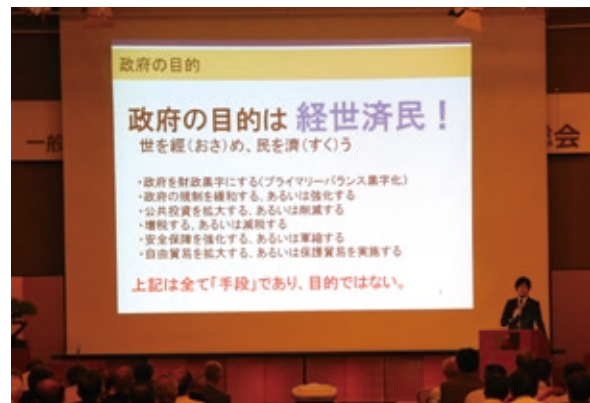


講師 三橋 貴明氏

三橋氏は、「企業の目的は利益の追求であるが、政府の目的は『経世済民』、国民を豊かにする政治を行うことである」とし、『アベノミクス』は個人の所得・消費を増やし、デフレからの脱却をはかろうと、大胆な金融政策、機動的な財政政策を行ってきた。

しかし、「第3の矢」となる「成長戦略」は、その逆の結果となるだろう政策ばかりである。

今、日本は岐路にある。再び繁栄するには、予測されている東海・東南海地震に備え、北陸新幹線を早期に走らせ第2国土軸をつくるなど、公共投資を拡大し国土を強靱化する政策が必要である。それが安全・安心な国土づくりとなり、新たな市場の創出につながる」と講演されました。



## 新たな観光時代を迎える飯山の期待



きむら ひろし  
木村 宏

一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長兼営業企画課長

1961年生まれ。日本大学文理学部ドイツ文学科卒。東京でホテル・リゾート開発の関連企業に勤務。1983年飯山市に移住。1986年から飯山市のグリーンツーリズム事業に参画。財団法人飯山市振興公社にてなべくら高原・森の家をはじめ施設運営に携わる。2006年NPO法人信越トレイルクラブの立ち上げ。2010年一般社団法人信州いいやま観光局設立に伴い移籍し、施設運営、商品の企画開発、営業に関わり現職。

### ■ 新幹線「飯山駅」開業が秒読み

いよいよ間近に迫った北陸新幹線（長野経由）の開業。やはり長野県民としてはこの括弧書きにこだわりたい。特に私ども飯山市民にとっては、延伸後長野を出て次の長野県内の停車駅が「飯山駅」ということで、長野駅の次は一足飛びで北陸に行ってしまうというイメージを何とかしても振り払いたい。

速達型の「かがやき」は目にもとまらぬ早さで飯山駅を通過していくであろうから、「はくたか」に乗ってお越しのお客様に向け、いかに飯山の良さをアピールしていくか、もう数ヶ月後に迫った開業までインフラ整備も含めて新たなお客様の受入体制づくりが急ピッチでおこなわれている。



新幹線開業に合わせ、移設オープンする飯山駅（イメージ図）

### ■ 飯山の魅力

飯山の魅力はなかなか一言で伝えづらいといわれるが、人々の生活とそれを育む豊かな森林やその恵みを受ける豊穡の大地、そして人が築いた歴史や文化が今もなお伝わる風土。四季の季節感。これらが訪れた人を包み込んでくれるような「感じ」ではないだろうか。

私は東京から移住して20年。こんな「感じ」は移住当時から変わらない。「感じ」が魅力というものも変なものかもしれないが、佇んでみてわかる「飯山の感じ」こそ飯山の魅力かと思う。

有名な観光施設があるわけではない、名の知れた温泉地でもない、ガイドブックにもあまりページが割かれぬ。それでも訪れた人が飯山ファンになってお帰りになっている実感はある。高野辰之が詠った千曲川に映る「辺り」の風景や、南木佳士原作の小説が映画化された「阿弥陀堂だより」の舞台の里山こそ、魅力的な「飯山の感じ」を描いている。

### ■ 信州いいやま観光局の役割

情緒的な魅力を醸し出す飯山に、文明の利器、どんなに望んでもすべての町にやってくるわけではない「新幹線」が停車し、駅ができるのだ。あの大都市、東京と直結。成田・羽田からのアクセスも格段に向上する。すなわち、国際観光都市の仲間入りというわけだ。

信州いいやま観光局は、新幹線がやってくる町として、半世紀に及ぶ歴史ある飯山市観光協会と、観光施設の運営に携わる（財）飯山市振興公社を統合し、一般社団法人として、2010年設立された。

「飯山の豊かな自然文化環境を活かし、新幹線時代に相応しい誘客力のある観光まちづくり『日本のふるさと体感の旅づくり』を推進し、農業や地場産業との連携による飯山らしい観光の振興を図り、以て地域経済の発展に寄与します。」

という経営理念のもと、スキー観光以来育んできた観光資源の旅行商品化に、まちづくりの役割が付加され、地場産業とともに発展する観光振興こそが我々に与えられたミッションだ。

現在 80 名体制でこのプロジェクトにあたっている。

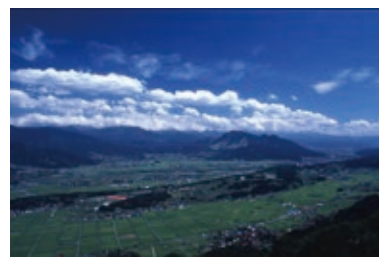
設立以来、「飯山感」を感じられる、飯山駅発着型を中心とした旅行商品「飯山旅々」の造成、楽しんで町歩きをしてもらう仕掛けづくり、森林を活用した滞在空間の構築やプログラム造成、訪日外国人をはじめ新たな旅行者を受け入れるための宣伝活動やシステムの検討、SNS 時代に呼応した情報発信の研究、特産品の開発、そして市が設置した観光施設（温浴施設・自然体験施設・道の駅・人形展示施設とそれに付帯する食堂）の発展的運営など、総合的な観光振興と情報の一元化に取り組んできた。飯山駅開業がいよいよ秒読みに入った段階で、これで十分といった意識はない。まだまだやるべきことが山積しており、焦る気持ちのほうが大きい。

これから開業に向けては、新たな商品の造成やブラッシュアップ、広域商品の販売、観光ガイドの養成、観光案内所機能の組み立て、人の配置、細々とした仕組みの具現化など、きっと新幹線の始発電車が走るまで、観光局の職員の心が安まることはないだろう。そして次の世代に続けていかななくてはならない「観光地：飯山」のおもてなし。新幹線の駅ができるからこそ、意識される観光地のあり方。いい意味で意識改革の機会になってほしい。

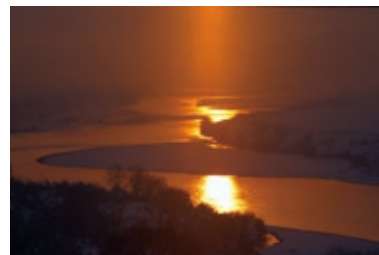
## 開業後の飯山の姿

飯山駅から半径 20 キロ圏内の 9 の市町村から成る地域ブランド「信越自然郷」の取り組みも始まっている。飯山駅に降り立った観光客が四季の魅力ある観光地をかかえた 9 市町村の観光地を訪ねた際、より効果的な PR ができるよう、イメージを作り、相乗的な効果を上げていこうという取り組みだ。いわゆる広域連携によるブランドイメージ戦略。各地で展開されている。海外に対するイメージ戦略でもあろう。

まさに玄関口としての飯山の役割を考えると、まずはしっかり飯山の観光地としてのおもてなしのベースを作り、より多角的な情報発信や観光客の誘導をはかれるか、そのための魅力的な駅づくりや駅周辺の活気あるまちづくりができるかがポイントだ。すなわち、我々観光局には、我が町の観光事業の推進にプラスして広域的な発展をも担う度量が求められているのであろう。この度量が発揮されたときこそ、次の時代に向かう飯山の姿が現れてくるのだろうか。それぞれの立場で大きなプレッシャーをかかえ、2015 年春北陸新幹線（長野経由）飯山駅が開業する。



雄大な山々と大河。  
豊かな自然や文化に恵まれた飯山市



千曲川の夕焼け

歩く速度でじっくりと里山文化を楽しむ旅のプログラム  
「日本のふるさと体感の旅～歩こさ飯山～」

歩こさ飯山の詳細はHPで

<http://www.iiyama-ouendan.net/arukosa-iiyama/top.php>

今、大地震が起これたらー過去の地震の痕跡から考えるー

平成26年度は、新潟地震から50年、中越地震から10年、阪神大震災から20年と地震災害の節目の年となる。去る5月24日、新潟市西区主催で開催された防災講演会で、新潟大学のト部准教授が先に公表された「新潟県津波浸水想定図」の解説と合わせ、半世紀たった今、新潟地震を振り返り、各自が地域に起きる災害を推測し行動する大切さを講演された。

新潟大学 災害・復興科学研究所  
准教授 ト部 厚志

1994年新潟大学で学位(理学博士)を取得。  
1998年より現職。新潟県津波対策検討委員会委員。  
地質学的な視点から、活断層、地震時の地盤災害、  
斜面災害や津波堆積物などの研究を行っている。  
また、防災教育の普及にも取り組んでいる。



3.11以降、東日本全体の応力バランスがくずれている

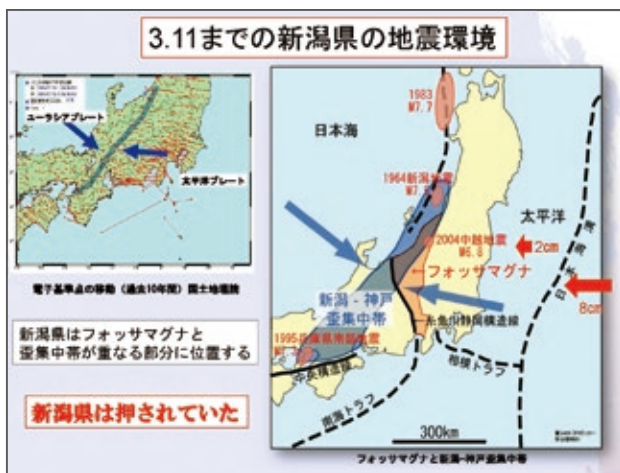
新潟県にはフォッサマグナという、大昔に日本列島が”く”の字に曲がって、日本海ができてきたときの古傷を抱えた断層帯がある。2011年3月11日に東日本大震災が発生するまでは、太平洋プレートが年間8センチメートル押しつけてきていて、日本海溝で6センチメートル分の力を蓄え、新潟県は太平洋側から年間2センチメートル押しされていた。

3.11以後、東日本全体がバランスを失い、新潟はそれまでとは動き方も押され方も違う不安定な状況が続いている。もし、この断層が内陸から沖合まで一緒に動くと、海底に段差ができ、上にある海の水が動き津波がくるということになる。

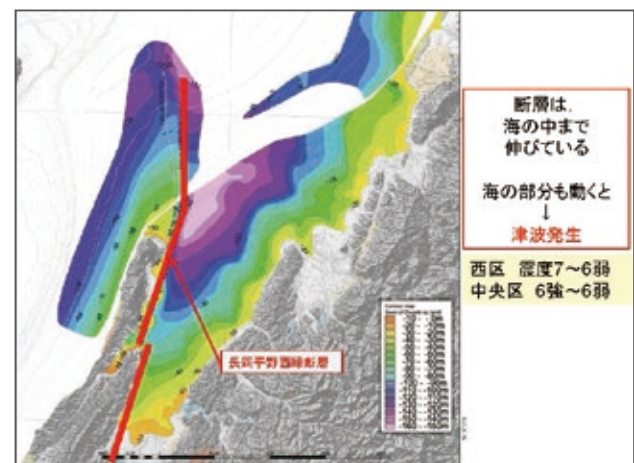
津波浸水想定図(平成25年度版)で見える新潟市

昨年末、新潟県津波浸水想定図(平成25年度版)が発表された。年度版と称しているのは、今後の新たな知見によって随時見直していくものだからだ。

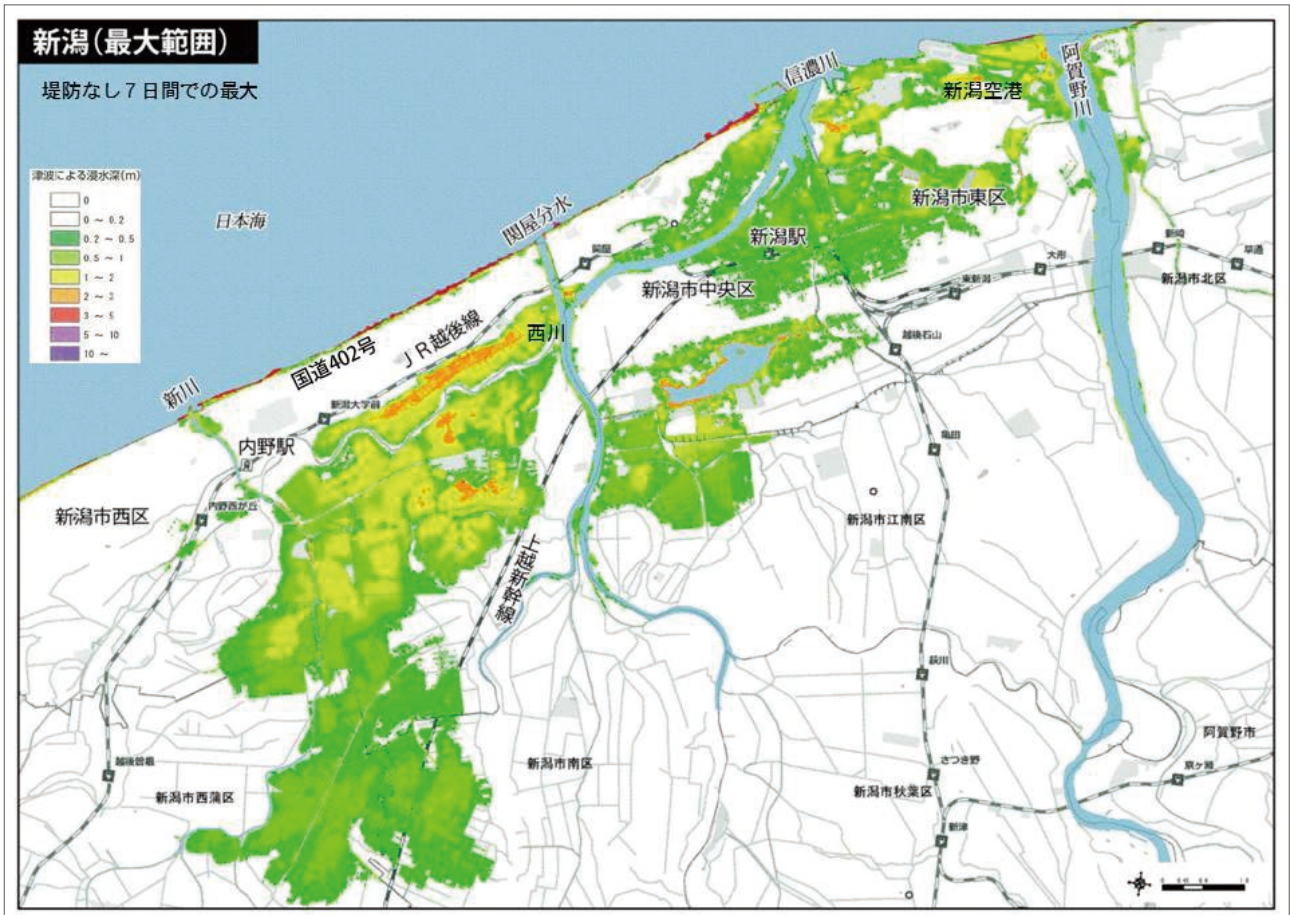
「長岡平野西縁断層(角田-弥彦断層)」が動くと、新潟市が一番早いところで発生から5分くらいで浸水、最大津波高は7メートル程度という数値が出ている。



新潟市西区(信濃川の西側)の近くには、角田、弥彦の山があり、この山すそを走る「長岡平野西縁断層(角田-弥彦断層)」が近年、日本海の沖合まで伸びていることが分かってきた。この断層が動くと、角田、弥彦の山側は上がり、平野のほうは下がる。



沖積層の深度分布と長岡平野西縁断層の分布



「新潟市の津波浸水想定図」上・右下 新潟日報 平成 25 年 12 月 27 日付朝刊転用

従来、河川堤防、海岸堤防は地震発生後もそのままの高さ、形状を維持して機能するものとして想定されていたが、東日本大震災で堤防が破壊され被害が拡大したことを踏まえ、今回は堤防が機能しないものと想定し計算した。

また、断層が動くとき平野が下がるということを新たに計算に組み入れた。

新潟市では地震発生から5分後、断層に近い新川の辺りから浸水し始める。津波はまだだが、地面が下がることなどで新川の水が浸入する計算だ。新潟空港も土地が低いため、阿賀野川の堤防を消してしまえば浸水する。津波自体は、信濃川河口からは15分後に入ってくる。

20分くらいすると少し浸水の範囲が増え、40分たつと、津波の勢いで川から水があふれ出す。新潟市は地盤が低いため、一度入ってきた水はなかなか抜けず、さらに低い内陸部に向かって動いていく。2時間くらいすると、このような動きを繰り返しながら水がじわじわと広がっていく。

1日後、津波は恐らく止まっているが、川の堤防がないという前提なので、水は低いところに入っていく、1メートルから1メートル半の

水深が広範囲に広がり、4日後にはさらに広がっている。言うなれば、津波の、というより、津波をきっかけとした災害の浸水想定だ。1週間くらいしたら破堤した場所が復旧されるのではないかというイメージで7日後まで計算した。



## 最悪のシナリオを考え備える

破れた堤防を止めに行きたくてもなかなか行けない。洪水で信濃川が満水状態になったときに、堤防が切れば、津波どころではない水が入ってくる。最悪の状況を想定すると、もともとの地面の低さが浸水の深さに非常に効いてくる。

洪水なら地面は下がらないが、場所によっては1メートル半くらい下がるのではないかという計算も入れてあるので、いま私たちが暮らす地面よりも水かさが増すという結果になる。

5メートルの波がくると、海岸沿いを走る標高5メートルの国道402号は水をかぶるかもしれない。砂丘が少し削られたら、さらによからぬことも考えられる。

新川の辺りは、5分くらいすると水が入ってくるので避難路として使えない。

あくまでもシミュレーションではあるが、もう少し考えなければならぬこともある。例えば、信濃川に合流する西川の排水ゲートを閉じる、その操作20分くらいの中に津波で水が入ってきたらといった計算を追加でやっている。

新潟市では、近くにある断層が動くとき津波がくる可能性がある。仙台のように大きな津波がくるわけではないが、河川を遡上してくるのが最大のポイントだ。

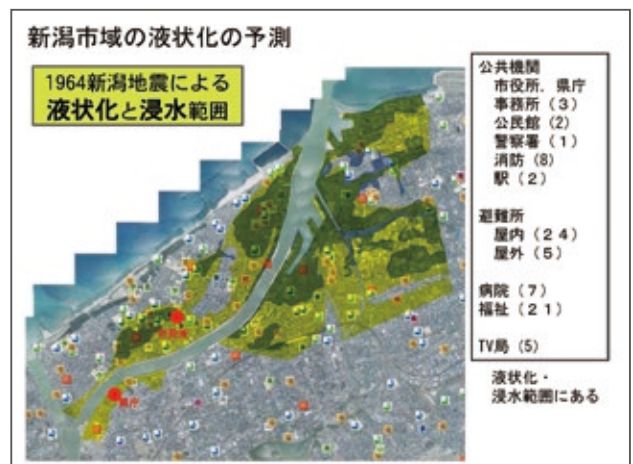
震源が分からない、情報がすぐにこないときには、まず逃げる。それで津波がこなかったら、笑って戻る。新潟市はどういうことが起こりうるのか想像し、地元の標高、周りの地形を知って、自分の行動の範囲内で避難の方向やイメージを持っていただきたい。すごく揺れたら津波がくるかも、東北よりは低いけど、といったふうに。

## 新潟地震の教訓「液状化」

新潟地震は液状化が特徴的な災害だった。当時は「液状化」という言葉すらなかった。液状化は粒のそろった細かい砂で、地下水位が高い場所に強く長い地震動が起きると発生する。特に旧新潟市域はその条件が揃っている。西区では、液状化で斜面が崩れ、5人の方が亡くなっている。新潟大学は、まちのどこで液状化があったか、道路にはどうヒビが入っていたか、家が傾いているかなど記録を取っていた。新潟市内には柔らかい砂地のリスクのある場所がいっぱいあり、当時のマップを今の地図に入れると、市役所、県庁、テレビ局、病院も液状化するだろうという範囲の中にある。



液状化で陥没した道路（若林茂敬氏撮影）



地震後、新潟市は「無災害モデル都市」を目指し、昭和石油が燃え周りの家が270件焼けたことから、工業地域と住宅地は別にし、総じて被害が少なかった砂丘地を住宅地にする土地利用を決めた。

しかし、液状化被害の軽減に向けた地盤対策がまだ追いついていない。被災した後、地下水位が高い泥の地盤の上にそのまま建て直している。

液状化は、同じ場所で何回も繰り返す。一回揺れても緩いまま残ってしまうので、再液状化が考えられる。

今ならば液状化は、お金は少しかかるが、地盤を改良することができる。新潟地震の時の液状化被害分布を活用し、液状化リスクの高い土地ならば、家を改築とか建て直すときには必ず液状化対策をする。そういう対策をつないでいけば、まちも強くなる。

「耐震」という言葉は、関東大震災以後100年かけてようやく理解が広がり、耐震性を上げ



ようと対策が徹底し建物が強くなっている。

「液状化」は、新潟地震から50年たちやっと認識が深まり、それに合わせてまちをバージョンアップしていこうという動きになってきた。

## 想定を超えたときに本当の災害が始まる

行政、大学は、なぜ「逃げて」としか言わないのかと聞かれるが、1,000年に1回とか、500年に1回という大きい災害では、逃げるしかない。地震、津波は頻度の低い災害なので、何か構造物をつくって防ぐよりは、まず逃げるということ覚え、事前に逃げる場所を考えておくということが重要だ。助かるところまでは自分でやるしかない。

1983年に起きた日本海中部地震では、男鹿半島で遠足に来ていた小学生が亡くなり、その後、防災教育を充実しなければということになった。しかし、3.11では、石巻市立大川小学校は津波がグラウンドまで押し寄せ、親が迎えに来るのを待っていた子どもや先生が亡くなった。大川小学校は、ハザードマップでは津波が来ないという計算で、避難所だった。津波が来たのは51分後で、裏山に逃げようと思えば行けたのだと思う。

釜石市は防災教育で、津波が来た時の避難経路を決め避難訓練をしていた。まずグラウンドにいた釜石東中学校のサッカー部の生徒が逃げ出し、ほかの生徒も後に続いた。「津波が来るぞ！逃げるぞ！」と普段から合同避難訓練をしている鶴住居小学校に声をかけ一緒に山道を走り避難場所まで行った。しかし、ここにも津波が来るかもしれないと判断しさらに上の高台まで逃げて助かった。いわゆる「釜石の奇跡」だ。

この防災教育の仕掛け人、群馬大学の片田敏孝先生は、まずは自分で考え最善を尽くしましょうと言われていた。津波の計算ができる片田先生が、「あなたたち、小学生、中学生が率先避難者になり逃げれば地域の人も続く。想定を信じるな」と指導しているから重みがある。

新潟市でも、まずPTA、コミュニティ協議会、地域の皆さんが学校に働きかけ、年に1回は防災訓練をして防災知識を身につけられるようにすれば、子どもたちは一生忘れないだろう。

新潟市は、液状化、津波、建物被害など、地震による複合災害が考えられる。

今、新潟地震と同規模の地震が来ると、新潟地震のときよりも少し津波が高いかもしれない。



液状化で道路が冠水した新潟市中心部（中村勝典氏撮影）

50年前よりも地盤沈下している場所がいっぱいあり、同じような水深では済まない可能性がある。道路の下には埋設物がいっぱいあり、下水道もある。こんなところに津波が来たらどうやって逃げればいいのかを考えなければいけない。

新潟地震を教訓とすることはたくさんある。しかし新潟地震の時はたいしたことがなかったという記憶や経験が、次の行動の阻害要因にならないよう、いつ来るか分からない災害に備え直してほしい。

### 講演会を聴講していた三富正典さん

公民館の地域デザイン講座（水害）を受講している。西区に105ある老人福祉施設が災害時にどういった対応を考えているのかアンケートを取り、今まとめている。

データベース化して、標高の低い所と高い所にある施設、あるいは耐震構造の施設、そうでない施設が災害時に協力できないか提案したいと思っている。

講演を聴き、あらためて、いろいろな災害を想定した対応が必要だと感じた。

# 特集「地域とともに」

## 新潟大学 災害・復興科学研究所 流域保全学研究部門の紹介

新潟大学 特任教授 丸井 英明、特任准教授 水野 正樹

### 1. はじめに

このたび、北陸地域づくり協会からの寄付により、平成26年4月1日付けで新潟大学の災害・復興科学研究所内に新たに「流域保全学研究部門」が設立されました。設置期間は平成29年3月31日までの3ヶ年となっています。この部門には、特任教授1名と特任准教授1名が配置され、研究・教育に携わります。以下に寄付部門の目的、主要研究課題、当面の活動などに関して紹介致します。

### 2. 設立目的

近年、気候変動すなわち地球温暖化によると思われる、極端で凶暴な気象条件によりもたらされる集中豪雨や異常降雪等の自然災害が多発しており、国民の安全・安心が脅かされています。また、わが国は長期に亘る人口減少の過程に入り、過疎化に伴い自然災害に対する国土の脆弱化が危惧されています。したがって、防災・減災のための有効な施策を抜本的に再構築することが焦眉の課題となっています。

そもそも北陸地域は、日本一長大な信濃川流域を擁しており、その支流域は数多くの荒廃溪流を抱えています。豪雨時には洪水の氾濫と並んで土石流等による土砂の流出も多発します。また、北陸地域には多くの構造線が存在し、第三紀以降の地殻の変動が激しく、急峻な地形や脆弱な地盤の地域が広く分布しています。したがって、地すべり地が広範囲に分布する他、様々な形態の大規模な崩壊すなわち深層崩壊も多々見られます。

近年において、北陸地域は平成16年7月に新潟・福島豪雨による甚大な洪水災害を経験致しました。さらに、平成23年7月にはそれを上回る降水量の新潟・福島豪雨による洪水災害

を再度経験致しました。何れの場合においても少なからぬ土砂災害が付随して発生しています。土砂災害に関しては、平成7年7月には上越地方で過去最大規模の豪雨により特に姫川流域で流域全体が一変するほどの甚大な土砂災害が発生しました。また、その翌年には蒲原沢土石流災害がありました。さらに、平成16年10月には中越地震により震源に近い地域では甚大な土砂災害を経験致しました。直近では融雪によると考えられる上越市国川の地すべりも発生しています。



写真1 平成23年7月新潟・福島豪雨災害で発生した河道閉塞（三条市遅場）



写真2 平成16年中越地震で発生した東竹沢地すべりによる河道閉塞（芋川が閉塞し上流側に湛水池が形成された）

北陸地域の自然は多様性に富み、農業生産等において豊かな恵みをもたらしています。その

一方では、上述の様に土砂災害や洪水災害が多発しています。このたび設立された「流域保全学研究部門」は、信濃川を始めとする北陸の主要な河川の流域を対象として、流域全体で発生する様々な形態の土砂災害並びに洪水災害の実態を系統的に把握・整理し、ハード対策とソフト対策を効果的に組み合わせた災害軽減のための施策を提言していくことを目的としています。

### 3. 主要研究テーマ

流域全体の保全の観点から、多様で複雑な形態で発生する土砂・洪水災害の軽減に関する研究を実施する訳ですが、特に主要な研究テーマとしては以下の2つを設定しています。

#### ①「土砂災害危険度評価法並びに危険区域設定法に関する研究」

既に述べたように、北陸地域では例えば地すべりや崩壊等の様々な形態の斜面変動による土砂災害が多発しています。そこで、それぞれの斜面変動現象に関わる有効な危険度評価法を見つけ出すことと、それを用いて適切なハザードマップを作成する方法を提案することが重要なテーマとなります。

#### ②「流域保全の一環としての総合的大規模土砂災害対策の研究」

これは甚大な災害をもたらすと考えられる大規模な深層崩壊に対する有効な対策を流域全体の中で総合的に考えようとするものです。すなわち、極めて大規模な深層崩壊に対しては土木施設により直接阻止するハードな対策を実施することは困難です。そこで、流出土砂を流域全体の中で調整するために必要不可欠なハードな施設とソフト対策の適切な組み合わせを検討することも重要なテーマとなります。

### 4. 教育・研究内容

前項で述べた主要研究テーマに沿って、流域保全学研究部門では、以下の様な教育・研究を実施することとしています。なお、当部門は研究所内に設立されたものでありますので、主体

は研究活動であります。それと連動して特に技術者の研修を念頭においた教育活動も予定しております。

#### 【教育】

- 1) 北陸地域特有の土砂災害の特性と災害対策に関する教育
- 2) 地域特性を考慮した対策工に関する教育
- 3) 自然環境に配慮した対策工のあり方に関する教育
- 4) 砂防対策の歴史と災害に強い地域づくりに関する教育

#### 【研究】

- 1) 北陸地域で発生した災害の特徴と地域特性に関する現地調査（写真3）・基礎調査・情報収集及び分析



写真3 災害時の現地調査の例  
（平成24年3月上越市板倉区国川地すべり災害の現地調査、撮影：新潟県）

- 2) 大規模深層崩壊のメカニズム解明と対策のあり方に関する研究

3) 地域特性に配慮した自然環境保全のあり方に関する研究

4) 流域保全の観点からの土砂災害対策のあり方に関する研究

以上のような具体的な活動を実施し、各年度末に研究成果を取り纏め成果報告書として刊行する予定です。

## 5. 平成 26 年度の教育・研究計画

平成 26 年度に計画する教育・研究の内容は次のとおりです。

### (1) 土砂災害対策に従事する技術者研修会の実施

豪雨時に天然ダム形成につながる異常現象が発生した場合、夜間や悪天候時においても天然ダム形成確認調査をおこなうため、国は、雨量レーダー、振動センサ、及び衛星 SAR 画像の 3 つの手法を組み合わせた大規模崩壊監視警戒システムを全国の深層崩壊の危険性の高い流域において構築することとしています。

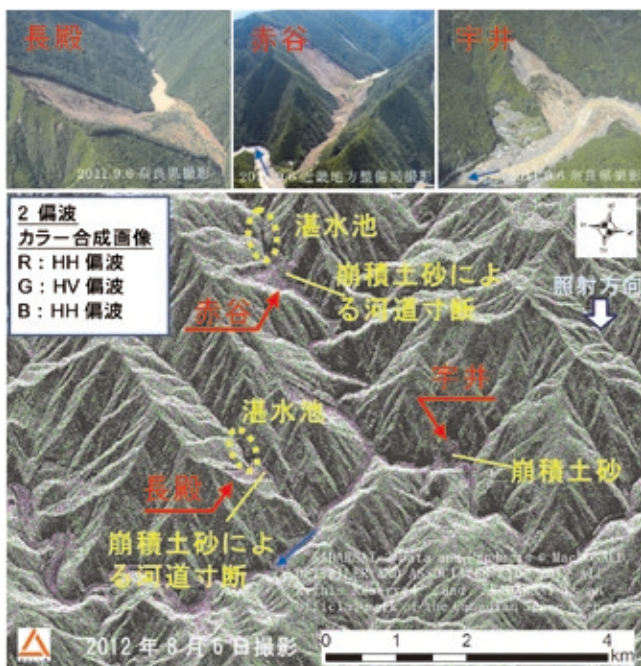


図 1 天然ダム探索に用いる 2 偏波 SAR 画像の例  
(平成 23 年台風 12 号災害、奈良県五條市付近、  
画像：国総研)

そこで、河道閉塞箇所を夜間、悪天候時においても画像判読から探索する手法(図 1)を含む、北陸地域特有の土砂災害の特性と災害対策について、防災担当の技術者等を対象に研修会を実施します。

### (2) 衛星干渉 SAR 解析による大規模崩壊危険度及び危険区域の把握手法の確立

地震や風水害等による大規模深層崩壊前に崩壊発生の危険度と危険な区域の範囲を把握することができれば、土砂災害被害の防止に有効です。

これまでも微地形判読によって、地すべり地形、二重山稜等の変状地形特徴の有無を調査することにより、過去に地盤変状が起きた地域については把握できました。しかし、山間部の広域な範囲内における、未確認の活動的な地盤移動の有無や、岩盤クリープ等で微小に移動している土塊の規模や発生する崩壊の規模については、把握や予測ができませんでした。

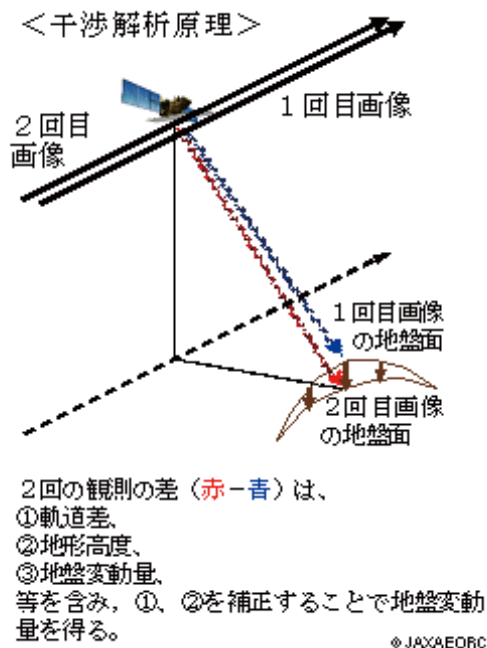
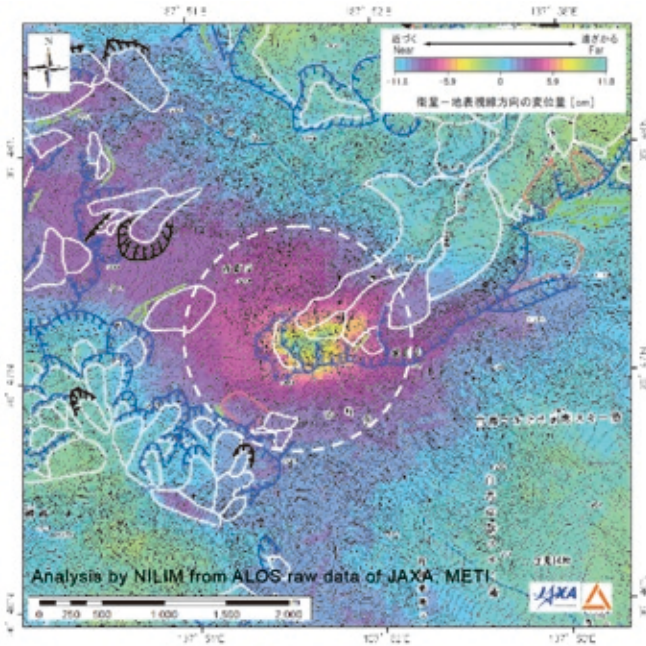


図 2 差分干渉解析の原理

そこで、大規模土塊の数 cm 程度の微小な変状を把握する技術である L バンド衛星干渉 SAR 解析(図 2)による、大規模崩壊危険度及び危険区域の把握手法の確立を図ります。そして、土塊の変状が発生すると予想される地震や豪雨後の時期に(ALOS-2) L バンド衛星 SAR 観測を行い、複数ペアの干渉 SAR 解析(図 3)を実施することにより、変状が拡大し大規模崩壊する危険度の高い箇所を発災前に探知することを目指します。



(2007/9/2, 2007/10/18 ALOS)

図3 赤倉山金山沢付近における干渉 SAR 画像例  
(数 cm 程度の移動を観測)  
(解析：国総研、基図：防災科学技術研究所  
地すべり地形分布図データベースより)

これにより定常的に大規模土塊の微小移動を広域監視できれば、深層崩壊前の危険度評価や危険な区域の設定につながるものと考えています。

平成 26 年度は、新潟を中心とした北陸地域の大規模深層崩壊や地すべり災害につながる土塊の微小移動状況を把握するため、ALOS 干渉 SAR 解析を実施します。

### (3) 東日本大震災の崩壊発生状況の記録

東日本大震災における崩壊の発生状況の記録は、崩壊地のおおよその位置や住宅地造成地の崩壊状況等の別々にまとめた資料が作成されていますが、崩壊地の発生位置とその形状を広域に一括して記録した資料はありません。

そこで、国内観測史上最大規模の地震で広域的な強震動を伴った東日本大震災の崩壊地分布や各崩壊の状況をより詳細に記録するため、入手・利用可能な高分解能光学画像を用いて、広域的な崩壊地判読を実施します。

今回実施する崩壊地判読は、今後も発生が予想される大地震に備える上でも、土砂災害による危険地域の絞り込み等のための重要な基礎資料となります。

### (4) 国際シンポジウムへの成果発表

平成 23 年 9 月の紀伊半島台風 12 号災害の時には、SAR 画像を判読して悪天候時により早く複数の天然ダム形成箇所を探索し、土砂災害対応に活用しました。また、2013 年 7 月のインドネシア共和国アンボン島の天然ダム決壊災害では、天然ダムの形成・決壊を衛星画像で捉え、災害の状況をいち早くインドネシア政府に情報提供しました。

これらの土砂災害緊急対応時の衛星画像判読を用いた国内外それぞれの実利用事例について、今年 11 月に開催される国際シンポジウム INTERPRAEVENT 2014 奈良で発表します。

## 6. おわりに

初年度では、特に教育に関しては、北陸地域特有の土砂災害の特性と災害対策に関わる研修の場を設定する予定です。一方、研究に関しては、まず北陸地域で発生した災害の特徴と地域特性に関する基礎調査及び情報収集とその分析を行います。さらに、大規模深層崩壊のメカニズムの解明と対策のあり方に関する研究に取り掛かります。

具体的な企画としては、7 月頃に「深層崩壊に関する研究会」を開催する予定です。まずは、深層崩壊に関する基本的な事項を整理しておきたいと思っています。また、10 月頃には土砂災害対策に従事する技術者を対象として、「北陸地域特有の土砂災害の特性と災害対策に関する研究会」を開催する予定です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。



丸井 英明 特任教授



水野 正樹 特任准教授

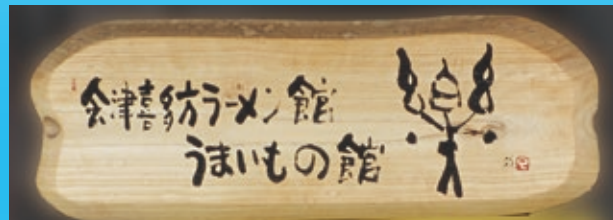
## シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

### 喜多方の思い出は「澁」**「うれしなみだ」**（福島県喜多方市）

喜多方市の枕詞とも言える「葎」と「ラーメン」に、新たに「漢字」が加わった。店の看板に古代文字で書かれた漢字は、道行く人の好奇心を誘い、ほのぼのとした交流が生まれるきっかけとなっている。「古代文字」に光をあて、まちの活性化を図ろうと活動している「喜多方を漢字のまちにする会」の責任者で、楽篆家の高橋政巳さんからお話を伺った。



白壁、煉瓦などの葎が点在する喜多方市の中心「ふれあい通り」



古代文字の看板が設置された店先



同じ花屋さんの看板でも書かれている古代文字は違う

#### ■ 古代文字から名前に込められた意味を知る

高橋さんが主宰する楽篆工房入口に「喜多方の思い出にお名前を古代文字でお書きします」と書かれた看板がある。12年前から記帳してくださった方に御礼として、その漢字の持つ意味を説明しプレゼントしている。



「楽しく・感じる・漢字」を伝えたいという  
楽篆家 高橋政巳さん

3500年前、中国（殷）王朝で使われていた文字を木や石に彫っている自分の存在を知ってほしかったこと、名前の意味を説明し篆書で書くことを修練の場としようと思ったからだとい

う。お客様に話して伝えるとしっかりと記憶に残り、お客様にも喜んでいただけるという相乗効果が生まれた。

次第にマスコミで取り上げられるようになり、学校、公民館で講演を頼まれ、小学校の卒業制作で篆刻が行われるようになった。漢字を学びたいという市民が集まり、平成23（2011）年から、「喜多方を漢字のまちにする会」とし

て活動するようになった。

折しもその年に東日本大震災が発生し、喜多方市は風評被害で観光客が激減していた。

#### ■ 漢字を学ぶ喜びを新たな観光資源に

「修学旅行は父兄が反対すると実施できないため特に被害が深刻だった。子どもたちが授業で嬉々として漢字を学ぶ姿からこれを観光資源にできないか検討し、店の看板に、一文字、古代文字で店のコンセプトなどを入れ、何だろうと興味を持ってもらうきっかけにした。6店から始め、1ヵ月もたたないうちに賛同する店が60店に増えた。3年経ち、180店に看板が置かれている。何回来ても新しい発見があるよう同じ漢字は使っていない」。

「漢字めぐり」は、グループでまちを歩き、看板に書かれた古代文字を10個程度探し、必ず店の人から書かれた漢字の読み方とその意味を聞き、その成果を持ち帰り発表する。

「子どもたちは、例えば入ったことのない魚屋で、店の人から漢字だけでなく、初めて見る棒鱈の話聞き、この土地の暮らし、食文化にふれ感動する。みんな目を輝かせ学んできた

ことを説明するので、先生も授業の準備に熱が入る。家でもその話で盛り上がり家庭のムードが良くなった」と漢字を使った社会勉強の効果で、学校、教室、家庭の風通しが良くなり、授業システムに組み込もうという動きが起きているそうだ。



古代文字の看板を探し、漢字、まちを学ぶ子どもたち

「この看板で、ラーメン店以外の店にも観光客が立ち寄るようになり、まち全体で観光客と接する喜びを知った」と漢字の魅力を強調する。

#### ■ 「漢字のまち喜多方」を全国に発信

漢字に親しんでもらう活動の一環として、感じる漢字あそび「創作漢字」コンテストを行っている。ルールは今まである漢字のへんやつくり、現在使われている漢字を組み合わせ、募集テーマを頭に描きしっくりくるよう創作して応募するというものだ。

これまで2カ月に1回のペースで行ってきたコンテストが20回となったのを記念し、選りすぐりの10点を切手シートとして販売し、「漢字のまち喜多方」を全国に発信している。

「漢字の部首の意味が解ると、一文字の中に描く思いを込めることができる。語源を覚えれば、子どもでも大人が読むような本が読めるようになる」といろいろな角度から漢字の楽しさを知ってもらいたいと考えている。

今年3月、観光庁と民間が協力して、新しい観光地をつくりだすイベント「タビカレ学園祭」で、参加した全国78地域から、喜多方市の古代文字をテーマにした「漢字のまち」の取り組みが、来場者の投票で総合部門全国1位に選ばれた。

「漢字めぐり」をもとに旅行会社が修学旅行誘致を目的に企画した「古代文字ミステリーウォーク」の人気ので、訪れる学校も少しずつ増えてきている。



漢字に当てはめた名前を篆刻する外国人観光客も増え、漢字は第三の魅力として定着してきた

「漢字のまち」を楽しんでもらおうというムードが高まり、喜多方認定ガイドの中には、高橋さんの講義を8回受講し、漢字の知識を活かしたまち案内をする人も出てきた。

高橋さんの夢は、「創作漢字」コンテストを続け、現在の暮らしにあった喜多方文字として定着させ、文部省から常用漢字に加えてもらうことだという。

喜多方で生まれた「創作漢字」を、新聞で目に見える日が待ち遠しい。



「漢字のまち喜多方」オリジナルフレーム切手

第25回感じる漢字あそび「創作漢字」募集中  
テーマ「夏」／応募締切：7月31日（木）

取材協力・問い合わせ先  
喜多方を漢字のまちにする会 事務局

〒966-0861  
福島県喜多方市寺町4771 楽篆工房内  
TEL・FAX 0241-22-3131

## 郷土の歴史を伝える最中「手取川昭和九年」(石川県能美市)



優雅な響きを持つ和菓子名が多い中、異彩を放つ「手取川昭和九年」。  
最中には、手取川大洪水を決して忘れてはいけない、度重なる氾濫にもめげずに沿川住民が力を合わせ乗り越えてきた「川筋根性」を伝えていかなければならないというメッセージが込められている。

### ■昭和9年手取川大洪水

昭和9年の冬は大雪だった。さらに雨期まで低温傾向が続き、山間部には多量の雪が残っていた。7月10日朝から降り続いた豪雨で残雪が一気にとけて流れ出し、水分を含みやわらかくなった地盤が、この雪と一緒に動きだし、手取川は未曾有の大氾濫を引き起こした。

7月11日付の北國新聞号外は、「手取川の大氾濫 沿岸の村落を押し流す」と大きな見出しで始まっている。

手取川から2kmのほど、能美市徳久町にある和菓子店「たなか」の3代目、田中栄一さんに伺うと、「100名近い人が亡くなった大きな水害で、店も床上浸水し泥を掻き出すのが大変だったと聞いている」と言うと、奥様の珠子さんが「辺り一面どこがどこの田んぼかも分からない大水になり、なかなか水が引かず家族は2か月近く2階で暮らしたそうです。お客様からも学

校から帰ると家の畳などの泥落としで遊ぶ暇がなかったという話をよく聞きます」と絶妙なタイミングで話しを続ける。



能美郡山上村字出口地内梅ノ木堤防決壊箇所ヨリ下流水田ヲ望ム 七月十九日(現在の能美市出口町)  
出典:「石川県大水害写真」(昭和9年 石川県発行)

洪水の度に、地元住民は力を合わせ復旧にあたり、川筋根性を培った

### ■「手取川昭和九年」誕生秘話

地元では、「九年のお菓子」と呼ばれ親しまれている「手取川昭和九年」。28年前、修行を終えた栄一さんが一生を通じ人々の心に何か伝えられる菓子にしたいとの想いを込め創作された。



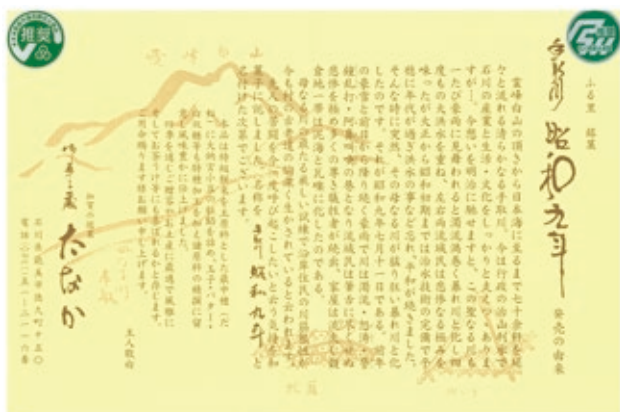
子どもからお年寄りまで喜んで食べてもらえるよう最中には、粒あんのあずきの他に、カステラとクリームが入っている。しっとりとしたカステラの食感とほのかに残るミルクの香りが洋菓子風で若い世代にも人気がある。里帰りした人がお土産にと買って帰ることも多いそうだ。

命名した2代目の栄次さんは、昭和9年当時、京都で修業しており、店にはいなかった。

水害を直接体験したわけではないが、店でお客さんと話すのが好きだったという栄次さんは、家族以外の人から洪水の惨状を聞く機会が多く、逆に客観的に災害を受けとめていたのだろう。

手取川ダムをはじめとする河川整備が進み、手取川は加賀平野を潤す母なる川となった。しかし、度々氾濫し多くの人命、財産を奪い、「川筋根性」を育てた郷土の歴史を決して忘れられないよう伝えていかなければならないという強い思いから「発売の由来」をつくり最中といっしょに渡すことにした。

「霊峰白山の頂きから日本海に至るまで七十余軒を延々と流れる清らかなる手取川。」で始まり「先人の苦闘を今一度呼び起こしたいと云う気持ちを和菓子に託しました」で終わる栄次さんの文章と挿絵、霊峰白山、川くら、蛇籠がデザインされている。最初はB6版だったが、「小さくてお年寄は見づらいだろう」とB5版がつくられた。



2代目の思いが凝縮された手取川昭和九年「発売の由来」

## ■手取川とともに

「地元の人的心里に残る名前をとつけてもらったが、お客様はどう思われるだろうと心配もあった。城下町金沢と加賀の間にある田舎町で、カステラ最中という名前で販売していたらここまで評判にならなかつただろう。今は奇抜なネーミングをしてくれた親父に恩を感じている」。

今年は水害から80年の節目の年で、取材の依頼も多いそうだ。父と違い接客は苦手という栄一さんだが、珠子さんとのお話は実にテンポが良い。



田中栄一・珠子さんご夫妻

お客様から昭和九年の話聞くことが多い珠子さんは、その度に災害と同じように忘れられている水の大切さを先人からのメッセージのように感じるそうだ。

2代目の「手取川昭和九年」に込めた思いは、3代目、4代目の息子良平さんと引き継がれ、この地で語り継がれていくだろう。

取材協力：御菓子處 たなか

石川県能美市徳久町ナ50  
TEL：0761-51-2116  
FAX：0761-51-0563



## 会員だより

「平成26年春の叙勲」で、栄えある勲章を7名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。受章者の方々からご寄稿頂きました。

### 瑞宝重光章

加藤 昭氏  
(千葉県千葉市在住)

元北陸地方建設局  
企画部長



### 北陸地建の思い出と近況報告

このたびの春の叙勲で受章の栄に浴しました。これも長年にわたって皆様から頂きましたご指導、ご厚誼の賜物と深く感謝申し上げます。

私は、建設本省、国土庁、北海道開発庁、近畿地建、東北地建、北陸地建、岐阜県に於いて34年余勤務しました。そのうち、北陸地建勤務は、企画部長として、平成2年2月～平成3年11月まで1年10か月余でした。在任期間には、その後北海道開発庁時代に遭遇した豊浜トンネル事故のような大事件に遭うこともなく、私にとっては緊張しつつも皆様の御支援により楽しい時を過ごさせていただきました。

心より感謝申し上げます。

私にとって、北陸地建の第一印象は、赴任した直後、地元新聞記者から、関越導水プロジェクト推進のための赴任か？と問われたことでした。この問いは、私の赴任直前の部署が、国土庁水資源課であることと関わりますが、地域にとって、資源としての水の大切さを再認識するとともに、「北陸の地へ赴任した」ことを強く意識いたしました。また、在籍した期間は、衆、参、新潟県知事、新潟市長選等、選挙の多い時期でした。

今年、古稀を超え3年余、1日の日課として、1日1事（私にとっては囲碁）、10人に会う、100頁の読書、1000字書く、10000歩散歩等、10の乗乗のルールに沿った生活のリズムを保ちながら、良き社会人をモットーに、社会に迷惑をかけないよう「日々好日」に過ごしたいと思っております。今後とも、今までと同様のご厚誼、よろしく願いいたします。

### 瑞宝中綬章

入江 洋樹氏  
(東京都足立区在住)

元北陸地方建設局長



### 建設省時代を思い出して

このたび、国土交通大臣から春の叙勲の栄誉を賜り、これも皆様方の長年にわたるご指導とご鞭撻の賜物と心から感謝申し上げます。

最初に配属されたのは、当時の中部地方建設局の木曾川上流工事事務所で、新採研修と局の見習いを終了して7月1日に赴任しました。丁

度その日は、梅雨期の洪水体制に入った日で、赴任早々、各出張所に洪水体制設置の連絡をしてほしいと云われました。建設省に入ったばかりの何も知らない人間に、早速こんなことをさせるのかと思いましたが、断ることができない性分なので、これを読むだけでいいからと言われて、当時は無線で各出張所に連絡しました。すると、あちこちから電話がかかり、「早口で何を言っているのか分かりません」との反応でした。これが私の最初の仕事でしたが、皆様のご厚意とご厚情により何とか建設省時代を過ごすことができました。

木曾川上流工事事務所時代、仕事ではなかなか敵わないので、サッカーなら負けないとサッ

カー部を作りました。当時の諸先輩に会うと、結構仕事もしたつもりなのですが、「入江君はサッカーをしていたな」と云われることが多いので少々残念です。主な仕事は、ダムの子備調査で、阿木川ダムと徳山ダムを実施計画調査に格上げしました。このことが、ダムとの付き合いが長くなる切っ掛けになりました。

一番大変だったと思うのは、沖縄の北部ダム事務所時代です。赴任したのは、丁度沖縄復帰10年目で、隔日断水の真最中でした。担当ダムは、福地ダム、新川ダムの管理、安波ダム、普久川ダムは試験湛水中、福地ダムの再開発、辺野喜ダム、羽地ダム、漢那ダム、瑞慶山（後の倉敷ダム）の地元交渉の合計8ダムでした。一年後にダム統管理事務所が開設され、試験湛水が終わった2ダムを合わせ4ダムの管理がそちらに移りましたが、新たに大保ダムの子備調査が加わりました。中でも地元交渉中の4ダムが大変で、いくら断水中の沖縄でも、水没する地元との交渉は一筋縄でいかず、色々勉強させていただきました。残念ながら、沖縄の北部

ダム事務所は計画されたダムを完成させ、今年3月末をもって終了となりました。今になって思えば、そんなに急いで仕事をしなくてもよかったですのではないかと思います。

最後が北陸地方建設局長で、北陸地建は初めてだったので、北陸地方特有の気候風土と文化、産業に触れ、新鮮な気持ちで勤務させていただきました。最も記憶に残っているのは、平成7年7月の梅雨前線豪雨です。直轄区間では姫川が破堤し、補助区間も千曲川、関川で破堤するなど、新潟県、富山県全域にわたって至る所で浸水被害や土砂災害を受け、あまりにも被害区域が広いので、その対応に苦慮しました。その中で姫川の破堤は、越流破堤でなく、急流河川に多い洗掘破堤であったので、急流河川の対応の勉強の必要性を痛感させられました。

最後になりますが、私が大過なく建設省時代を過ごすことができたのは、皆様のご指導とご協力の賜物でありますので、深く感謝申し上げます。

## 瑞宝中綬章

霜島 稜一 氏  
(千葉県船橋市在住)

元北陸地方建設局  
道路部道路調査官



### 雪の新潟

この度、瑞宝章を受章いたしました。北陸の皆様には、長らくご無沙汰しておりますが、在勤中およびその後のご厚情の賜物と感謝しております。

公務員の在勤30年のうち北陸地建にはわずか1年間でしたが、公私ともに忘れがたい時間を過ごすことができました。

新潟に赴任したのは、前年に上越新幹線が開通した昭和58年の暑い7月、1年でまた転勤になるなどとは思わなかったもので、家族4人（妻と小学生3人）を引き連れての赴任でした。宿舎は紫竹、子供達の小学校は歴史のある沼垂小学校でした。

前任の和田さんからは「北陸地建は雪の問題には最重点で取り組んでおり、全国的にもリードしている、道路調査官は雪対策の司令塔たれ」と指導されたことを覚えております。

確かに職員が雪の問題に真剣に取り組み、誇りを持って仕事をされていることが実感されました。しかし、その年も12月末まではほとんど大した雪には見舞われず「やれやれ、たいしたことはない、楽をできそうだ」と肩の力を抜いていました。

ところが年が明けたとたんに突如として連日の降雪が始まり、山間部に比べて降雪量の少ないはずの新潟をはじめとする海岸近くの平野部でも横殴りの雪であつという間の積雪、正月休み明けには、単身赴任で新潟に戻ってこられた方々が雪のため官舎に入れないほどになりました。

それから3月末までは大雪対策に追われました。おそらく当時の北陸地建の雪対策のすべてのノウハウと力量を出し切った対応だったと記憶しています。私はあまり戦力にはならなかったように思いますが、ひっきりなしにやっ

てくる東京方面からの議員視察団等の出迎えに何度も越後湯沢駅に出かけていたのを覚えています。

3月末にようやく雪の残量も減りましたが、後にはスパイクタイヤで真黒になって路側にうずたかたまった雪、雪の重みでへしゃげたガードレールなどの光景が記憶に残っています。

北陸地建を離れて時が経ち、当時の雪の記憶は次第に薄れましたが、当時小学1年生で雪に埋まりそうになりながら学校に通っていた末娘が、その後新潟大学に進学して新潟で大学生活を過ごし、長女も新潟県出身者と結婚して新潟にしばらく在住したので、再び懐かしい新潟に

行く機会を多く持つことが出来ました。孫2人は新潟市立白山保育園、関屋小学校にお世話になりました。

与えられた機会を利用して、思い出を書かせていただきました。今後は、なかなか足が向かなかったOB会にも顔を出してみたいと思っておりますので、「あんた誰？」と言わずにお付き合いをよろしくお願いいたします。



## 瑞宝中綬章

辻 靖三 氏

(千葉県白井市在住)

元北陸地方建設局  
金沢工事事務所長



### 土木志して半世紀

この度叙勲を受けることが出来ました。叙勲は70歳以上の方が受けられるものですので、私は気分的にはまだ60代半ばの積りでいたので、叙勲のお話が来たときには、私自身、その年齢になったのだと、自覚させられました。

振り返ってみれば、1964年の学生時代の20歳の時に、理系の専門を選択する際に土木を選んだのが始まりでした。当時は戦後の復興が進んで生活、経済が軌道に乗りつつあるところでした。その時にアメリカのTVA計画(テネシー溪谷総合開発計画)「TVA-Democracy on the March」の本を目にして、日本でも更なる発展にはこのような国土づくりができると良いなど、土木を選び、大学卒業後は建設省に入りました。それから、50年、半世紀の間、携わったこととなります。

入省時に北海道開発局に配属になったことが縁なのか次の現場は北陸であり、そのあとの現場も東北と、都合、北海道4年、東北2年3か月、北陸9年、都合15年3か月が雪国勤務となりました。その後も本省との出入で国土庁、沖縄

県、関東、土研と様々な部署を経て、退官後も法人、公団、民間会社と、様々な体験をさせていただきました。それぞれの勤務先で本当に数多くの方々と一緒に仕事ができ、繋がりがありました。

中でも北陸では新潟5年、富山1年、石川3年と3県とも生活し、仕事でも濃淡はありますが多様な地建業務を体験しました。北陸各地で様々な整備が進み、良い地域となっていくのを見ることが出来、その過程に自分も関わってきたことが実感できることは、土木技術者を選んで、幸いであったと感じています。

土木の仕事は地球上に施設を造り、機能させていくことなので、造るにしてもかなりの年月がかかり、機能させていくことは何世代にも亘る時間軸の仕事です。携わる者も数多くの人々が受け継ぎ、受け継ぎしていく仕事です。この連鎖の中で、私はその一時期に関わっているのですが、その時に自分ながらベストと考えられる行動し、次にバトンタッチします。土木は、自分が考え、行動したことが、ずっと地球上に残り、機能していくことが見られる魅力的な仕事です。このやりがいのある仕事に携わり、その時その時のチームメイトと生き生きと仕事出来、自分も成長できた場が北陸であり、その体験がその後の私の生き方の基本になったと思っています。北陸の皆さんには、愛着深くお付き合いいただいたことに感謝しております。

## 瑞宝小綬章

中岡 智信 氏  
(東京都港区在住)

元北陸地方建設局  
企画部長



### 叙勲御礼

このたび、天皇陛下から勲章を授与され、5月15日に伝達の後、皇居に参内して拝謁の栄に浴しました。これは、偏にこれまで私が所属した団体、組織、部署の皆様のおかげであると深く感謝する次第です。

評論家の御厨氏によると「行政は匿名で行われるもの」だそうです。仕事は組織ですのものであってチームの一員である個人は与えられた役割を果たすことが求められます。私は、学生時代はサッカーをやっていて監督、選手、控え要員がそれぞれ役割を持っておりそのどれかが欠けても勝利には繋がらないことを身をもって感じていました。建設省で過ごした30年間はその思いを一層強く確認させてくれました。田中角栄氏は「駕籠に乗る人担ぐ人その又草鞋を作る人」といいましたし、竹下登氏は「司々でやっている」と言いました。私は、退官後、公

益法人や民間会社の役員を経験しましたが、常づね自分の置かれた「司」即ち役割を全うするよう心掛けてきました。

一方で、どんなに立派な人でも叙勲の榮譽にたどりつくのは容易でないことをたくさんの事例から見てきました。私は、建設省に在職中、いくつかの団体を指導監督する部署に所属することがあります。ここでは、叙勲や褒章などの推薦の取り次ぎをすることがありました。長い間功績を積み重ねられたうえ立派な人格で周囲からも尊敬され十分顕彰に値する人でも関係団体や組織などで不祥事が起きるとたとえ本人は直接かかわりが無くても顕彰が見送られることがしょっちゅうでした。その中であって、私はこれまで幸運にも大きく世間をお騒がせするような事に巻き込まれることなく70歳を迎えることができたのは稀有のことだと自分自身にいきかせることにいたします。

このことから、今回の私の叙勲は私が所属した全ての部署の全ての友人のおかげであるし、むしろこれらの人たちに与えられたものだと思います。

どうか、天皇陛下のお墨付きを戴いた「良い人」とこれからも親しくお付き合いいただくよう皆様をお願いいたします。

## 瑞宝小綬章

山内 勇喜男 氏  
(新潟県長岡市在住)

元北陸地方建設局  
道路部長



### 北陸に25年余

この度、平成26年春の叙勲で、受章の栄に浴しました。5月15日(木)に東京プリンスホテルで国土交通大臣から勲記と勲章の伝達を受け、その後、皇居で天皇陛下に拝謁し、陛下から労いのお言葉を賜り感激して帰ってまいりました。また、これに先立つ4月22日の叙勲閣議決定直後から半月ほどのあいだは、国会議員の先生方、県知事さん、地元市長さん始め、お

世話になった多くの方々からお祝いの電報等をいただき、喜びと恐縮の日々を過ごしました。これはひとえにこれまで多くの方々からいただいたご指導、ご鞭撻、ご支援の賜であり、心から感謝申し上げます

最近、今回の受章に関連した出来事がありました。第65回全国植樹祭の式典が、天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ6月1日に長岡市のハイブ長岡で挙行されましたが、この前日の5月31日に天皇皇后両陛下の行幸啓に係る特別奉迎が長岡駅新幹線待合室前(新潟県知事、長岡市長等はプラットホーム)で行われました。私も特別奉迎者(新潟県知事、長岡市長、国会議員、県議会議員、受章者等)の一人として参列させていただきました。受章と奉迎、わずか半月の間に二度も天皇陛下にお目にかかる機会があっ

たことは極めて稀で、しかも光栄なことであったと思っています。

私が北陸地方建設局道路部に赴任することとなった辞令は、昭和64年1月1日付のものでしたが、直後に昭和天皇が崩御され、年号が平成に変わりました。赴任のために宿泊した万代荘でのテレビ放送が、悲しみに満ちたものであったことを今も覚えています。北陸地方建設局の後には、石川県、新潟県に勤務し、新潟県庁在職中に長岡市青葉台（長岡ニュータウン）を終の住処とすることに決めました。その後、平成7年に建設省を退職、北川ヒューテック（株）に再就職と、結果的に平成はすべて北陸に縁がある生活となった訳です。

北陸地方建設局では万代橋下流橋（柳都大橋）の都市計画変更、国道289号八十里越、能越自動

車道、金沢東部環状道路の着手の頃で、大きな事業がこれから動きはじめる希望に満ちた時期でした。八十里越は豪雪地帯であるうえ急峻な山岳地帯を通るルートであるなどの理由により、いまだ供用開始には至っていませんが、同じ権限代行であるものの当時は都市計画決定もできていなかったニュータウンブリッジ（フェニックス大橋）が昨年11月に完成するのを見ると、道路行政にも時代的な流れの変化が感じられます。今後も北陸地方の事業がどのように展開するのか楽しみに見ていきたいと思っています。

北川ヒューテック（株）を退職して以来、青葉台の自宅で無為の日々ですが、この受章を機会に今後をどう過ごすか再考してみたいと考えています。今後とも変わらぬご交誼のほどお願い申し上げます。

## 瑞宝双光章

鞍馬 博志 氏

（新潟県長岡市在住）

元北陸地方建設局  
用地部用地調整官

### “ 出会い・巡り会い ”

このたび、春の叙勲でははからずも「瑞宝双光章」の受章の栄に浴し、5月15日国土交通大臣から勲記と勲章の伝達を受け、その後皇居に参内し、天皇陛下に拝謁の栄誉とお言葉を賜り、この上ない感激でした。

これもひとえに、先輩、同僚の皆様方のご指導とご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

私は昭和37年に新津工事事務所に入所し、北陸地方建設局管内の岐阜県と長野県以外の5県の各事務所に勤務し、在職30数年間のほとんどで用地関係の仕事を担当してまいりました。巡り合わせというのか、河川事務所の勤務が多く（信濃川、阿賀川、富山、黒部、金沢）、また、ダムと砂防の各事務所にも勤務し（阿賀川【大川ダム】、黒部【宇奈月ダム】、横川【横川ダム】）、飯豊山系砂防、黒部・金沢の砂防を担当いたしました。道路事務所の勤務としては、高田、富山、金沢（ほんの4ヶ月）の各事務所だけといった勤務経歴です。

ダムの事務所に携わった場合には、ダムの竣工後に「職員記念碑」が建立され、携わった者の名前が刻まれます。3ダムの「職員記念碑」に名前が永久に残るといって「巡り合わせ」のお陰と感慨深い思いがあります。

ダムの用地補償といえば、特殊補償が特徴的ですが、大川ダムでは、東北電力（株）所有の大川発電所の廃止補償と2漁業協同組合（南会東部非出資・会津非出資）に対する漁業補償があります。2漁業協同組合とは9年余りの漁業補償交渉の歳月によって、昭和57年2月に補償契約書の調印となりました。宇奈月ダムでは、関西電力（株）所有の柳原発電所の水没に伴う移設補償と黒部川内水面漁業協同組合に対する漁業補償があります。関西電力（株）とは移設工事費の他に移設工事中の減電補償と移設後の新柳原発電所との有効落差の減少（足切り）に伴う永久減電補償があり、近畿地区での補償交渉（対地権者との）で培った交渉通う（失礼！！経験豊富でした。）で補償交渉は難航しましたが、20数回の交渉を重ね、平成2年にどうにか移設工事費等の補償契約の協定を締結となりました。

河川事務所での用地業務では、信濃川事務所の魚野川改修事業（小出地区）に伴う約300戸（当

初)の家屋移転が、その後、土地区画整理事業の公共施設管理者負担金により、約2倍の家屋移転の調査・積算業務となりました。

道路事務所での用地業務では、高田工事事務所の一般国道18号の妙高～野尻バイパス工事に伴う用地取得では、9月に着任した当時は地元には対策委員会の窓口もなく、対策委員会作りから始まり用地交渉も難航しましたが、暮れも押し詰まった12月27日に契約調印式となり無事に年も越せました。

北陸地建を退職して14年、管内の各事務所を勤務して出会った人達と現在NPO研究委員会で会員相互の親交を図って、有意義に活動しています。NPO研究委員会が設立された当初は、中越地震直後でもあり当時の(社)北陸建設弘済会のご支援等もあり被災地の定点観測や全国からの視察に対するガイド等で活発でしたが、現在は美化活動や講習会等と活動も少なくなりましたが、会員相互の親交を図って楽しく(?)活動しております。

在職時に全国の用地職員だった仲間で「千年紀会」を作り、今までに持ち回りで14回の交流会があり、昨年は広島(安芸の宮島)で行われました。古希を迎えた年でもあり、出雲大社にお参りした後に広島で合流しました。

現在は、約20年間の単身生活や長距離通勤等で、町内活動や地域活動に参加・協力が不十分で迷惑をかけて来ましたので、町内の花壇の花植えや役員等で「地域のため」に微力ですが頑張っています。

ここまで元気でこれたのも、先輩・同僚・出会った中間の皆様は勿論ですが、単身生活や長距離通勤等で大変な時も、常に励まし・助言してくれた妻のお陰と感謝しております。



※7名の方の官職は北陸地方建設局在職時のものです。

## ◆ 今号から表紙は土田和男さんの絵です ◆

### 明治天皇が絶賛された阿賀野川 土田 和男



この度、北陸地域づくり協会から会報「地域づくり in ほくりく」の表紙絵を描くようにというお話をいただき、恥を忍んでお引き受けいたしました。

武川、田原画伯の後でもあり緊張しております。まずは私の地元でもあります阿賀野川から描くことといたしました。

この地は、明治天皇が渡し船で渡河され、ここから阿賀野川の眺望を絶賛された所でもあり、また、野口英世の師でもある細菌学者

の北里柴三郎も、ベルリン大学から日本に戻って初の研究が阿賀野川のツツガムシで、金屋地先から阿賀野川を眺められているのです。

内務省の阿賀野川の改修は大正2年の災害を契機に大正4年からですが、それ以前は地方行政の普請で、阿賀野川は奔放に暴れまくり、新発田の五十公野辺りまでも流れていたようです。

災害と凶作で天保4年から7年に飢饉があり、貧民は田の青み泥をすするなどの放浪者も増え、死者も多かったと言われています。

この地域で今も伝わる方言に「天保こき」があります。信じがたい話をする人を「てんぼこき」と言い、語源は「天保の飢饉」の凄まじさから来たものだと聞いています。

# 伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。  
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
若郷湖さわやか フェスティバル2014	7月19日(土) 10:00～14:00	会津若松市 大川ダム周辺	ダム見学会・ダム湖巡視体験など	大川ダム管理支所 TEL:0242-92-2839
高瀬渓谷フェス ティバル2014	7月19日(土)	大町市 大町ダム周辺	ダム内部見学会・ 龍神湖巡視体験など	大町ダム管理所 TEL:0261-22-4511
東区区民 ふれあい祭	7月21日(月)	新潟市 東総合ス ポーツセンター	ふれあいにぎわいイベント・ 東区特産品販売	東区役所 地域課 TEL:025-250-2170
平成26年度 防災エキスパート 講演会	7月22日(火) 15:00～17:15	新潟市 チサンホテル 新潟	講演①「にいがた地形防災学 ー過去からの地図を重ねてみればー」 講師:新潟大学理学部 准教授 奈良間 千之 講演②「時速200kmの救急治療室 ー新潟県ドクターヘリの紹介ー」 講師:新潟大学大学院 歯学総合研究科 救命救急分野 教授 遠藤 裕	北陸地域づくり協会 企画部 (北陸地方防災エキ スパート事務局) TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205
おいしいダム 湖畔まつり	7月26日(土)	関川村 大石ダム周辺	大石ダム・発電所見学・ ウォーキングラリーなど	大石ダム管理支所 TEL:0254-64-2251
しゃくなげ湖 まつり	7月27日(日)	南魚沼市 三国川ダム周辺	監査廊見学会・ 巡視船体験試乗会	しゃくなげ湖畔開発公社 TEL:025-774-2200
白い森おぐに湖 体験	8月3日(日)	小国町 横川ダム湖周辺	カヌー体験・ 横川ダムと横川発電所見学など	横川ダム管理支所 TEL:0238-62-2264
小松市民レガッタ	8月3日(日)	小松市 梯川丸内地区	ボート競技会	小松市ボート協会 TEL:076-220-2392
第10回 社会資本整備 セミナー	8月18日(月) 13:30～16:00	新潟市 新潟県トラック 総合会館	講演①「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師:北陸地方整備局担当官	北陸地域づくり協会 技術部 (社会資本整備セ ミナー事務局) TEL:025-381-1882 FAX:025-383-1470
	8月19日(火) 13:30～16:00	長野市 長野バスターミ ナル会館	講演②「東日本大震災からの教訓 と今後の備え」 講師:東北地域づくり協会 地域事業部長 山内 芳朗	
	8月20日(水) 13:30～16:00	富山市 ポルファート とやま		
	8月21日(木) 9:30～12:00	金沢市 石川県地場産業 振興センター		
第12回 萬代橋誕生祭	8月23日(土)	新潟市 萬代橋 周辺やすらぎ堤	水辺のカフェ・コンサートなど 予定	中央区役所 建設課 TEL:025-223-7410
阿賀野川 フェスティバル	9月15日(月)	新潟市 阿賀野 川水辺プラザ	ステージショー・地元の物販など 予定	秋葉区役所 建設課 TEL:0250-25-5690

## 編集後記

手取川大洪水から80年、新潟地震から50年、東日本大震災から3年。北陸には災害が多い。  
災害から自分の命を守るには、日頃から、自分が住んでいる場所、仕事や買物に行く場所がどういふ所なのか理解し、次に適切な行動がとれるよう考えておく必要がある。  
時には、災害史を振り返り、先人達はどのようにして、またどんな想いで苦難を乗り越えてきたのかと思いををせ災害の痕跡を訪ねる散策もいいだろう。  
過去を知り、現在に活かし、未来につなぐ。防災・減災は、一人ひとりの記憶と想いを地域で共有する行動から始まるのではないだろうか。(事務局)

## 地域づくり in ほくりく 第4号

発行 平成26年7月1日  
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会  
〒950-0197  
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号  
電話 (025) 381-1160  
FAX (025) 383-1205  
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>